リバプール、海商都市の歴史観光

種　田　　明

静岡文化芸術大学研究紀要抜刷
第10巻　2010年 3 月

リバプール、海商都市の歴史観光

Liverpool-Maritime Mercantile City, a historic city tour

種田　　明
文化政策学部文化政策学科

Akira OITA
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本研究は２００８年欧州文化首都リバプールを分析の対象にしている。中世の小さな漁村は、１８世紀第一四半期から１９世紀初頭まで「（いわゆる奴隷）三角貿易」の中心の港として繁栄した。奴隷貿易廃止（１８０７年）以後は、南北アメリカ・オーストラリアおよびその近隣やその他への海外移民の送出港として、ある研究者によると９００万人（かそれ以上）のヨーロッパの人びとを見送ってきた。
こうした「負の遺産」にもかかわらず、２００４年にはユネスコ世界遺産リストに登録され、２００８年には欧州文化首都に選定されている。　（文化政策研究科長研究費０８調査研究報告 / 種田担当分）

This paper analyzes Liverpool. Its waterfront area of the city, Liverpool-Maritime Mercantile City, was granted UNESCO World Heritage and was registered with the WHC-List in 2004.
Liverpool, but we know was mainly in the 18th and in the beginning of the 19th century the apex of the 'slaving triangle' in which manufacturing merchandise of Britain was traded for African slaves, who were then shipped to the West Indies (now Caribbean) and America where they were in turn exchanged for raw cotton, sugar and tobacco.
Liverpool, after the abolition of the trade (1807), was the port that continued to grow and to cope with wholesale British and European emigration, which a researcher counted up to 9 million people leave for the Americas, Australasia and so on between 1830 and 1930.
Although Liverpool has its 'negative' inheritance, the city is selected as European Capital of Culture for 2008.

奴隷貿易、負の遺産を見すえて

リバプールは近世以降、世界有数の港湾都市として発展したところである。また、１９６０年代に一世を風靡した音楽グループ“ビートルズ”の出身地であり、サッカーではイングランド・プレミアリーグ（プロ１部）でビッグ４（*）の一角をなす人気チームを擁する大都市でもある。

＜＊リバプール、マンチェスター United、とロンドンのチェルシー、アーセナル＞

しかしながら世界的海港都市リバプールの発展の、そのかなりの部分を担ったのは１８世紀を最盛期とする“奴隷貿易”であった。ヨーロッパ中世から近世にかけての海上商業貿易の繁栄は、１５世紀までの「地中海⇔北アフリカ」諸都市を結ぶものから、１６世紀以降大西洋側の「カナダ、アンティル諸島（西インド諸島）、西アフリカ ⇔ イギリス・フランス・オランダほか大西洋につながる諸国」の間の、いわゆる三角貿易へと移行していった。この間、約４００年間、１６～１９世紀にわたりアフリカと北アメリカ‐ヨーロッパ間、大西洋を横断する奴隷貿易において、取引された奴隷の約１０分の１、約１５０万人のアフリカ人が船でリバプールに、またリバプールを経由してブリストルやロンドンその他へ輸送されたのである。

リバプールから最初に出港した奴隷船はリバプール商人の船で、１６９９年１０月３日２２０人のアフリカ人をバルバドスへ運んだという。それから２０年、奴隷貿易はゆっくり発展した後、急激に成長する。１７５０年頃までリバプールからは、アフリカへよりも他の主要奴隷貿易港ブリストルやロンドンへ、より多くの船が出航していった。リバプール商船こそ、奴隷取引が禁止される１８０７年まで、奴隷貿易の中心に位置していたのである。奴隷貿易が合法だった最後の１５年間、リバプールは英国の奴隷取引の８０%、ヨーロッパの取引の４０%以上を扱っていたのである。(1)

奴隷貿易は、リバプールの形成と今日の大都市への発展に大きく寄与した。しかるに、「全体としての奴隷貿易がイギリス経済にどういう意味をもったかという問題は、これとは別に論じられるべき」（川北稔）(2) である。また一方に、奴隷貿易と砂糖プランテーション（西インド諸島）こそがイギリス産業革命を生んだとするグループがおり、他方には奴隷貿易やカリブ海の砂糖プランテーションは「誤った投資」だ、とするアダム・スミス以来

の説を支持するグループがいた。計量経済学的な手法によっても、奴隷貿易は100%以上の利益をもたらしたという見解がある一方、収益率は意外に低く、末期にはリバプールの商会の多くは破産状態にあったとする説もある。

さまざまな学説・数量計算があり、奴隷貿易に関しては推計で論じられることがほとんどである。諸説の中で一致している事実は、リバプールがイギリスの、さらにはヨーロッパの奴隷貿易の“首都”であったことである。人権侵害・人種差別を言うまでもなく、奴隷貿易はリバプールの「汚点、負の遺産」である。しかしながら奴隷貿易による発展こそ、リバプールに都市としての固有の歴史的文化的性格を付与し、都市インフラの背骨となったもので、これを抜きにしてリバプールを語ることはできないのである。

リバプールの港湾や市内にある産業遺産を含めた歴史遺産と博物館（後述）の展示・内容は、ほとんどが“18世紀リバプールの「奴隷貿易」「港湾設備」「都市」「商業」に関係するもの”である。以下にリバプールの成長・発展・展開をたどってみることにする。

都市リバプールの発展

現在、イギリスの十大都市の1つであるリバプールの人口は、約47万人である。（表（1）参照） 日英比較をすると、日本の政令指定都市（人口要件70万人程度以上）19と中核市[3]の39を加えた58市が、イギリスでは人口要件のみのベスト10で3位～10位に入ってしまう。また日本の海港都市でリバプールとほぼ同規模なのは、中核市の長崎市（45．7万人：2005年）、横須賀市（43.3万人：同）、人口要件だけでなら倉敷市（46.8万人：同）である。

都市については、地域・民族・宗教などの違いから歴史研究の4つの領域〔日本・中国・ヨーロッパ・イスラム圏〕で、それぞれに「都市論」「都市史」「都市政策」があり一般論としては論ずることができない。したがってここで、ヨーロッパの都市の発展はいったいどのようなものであったか、を人口の増加の変遷だけから英・仏比較し300年を概観したのが次の表（1）である。

周知のように、第2次大戦まで輸送の主役は海洋・河川・運河の利用、すなわち船舶であった。表（1）の都市を地図で位置確認してみると、内陸都市で河川・運河に沿う少数をふくみ、すべての都市が物流の拠点である「港湾」設備をもち、水運で他とつながっている。

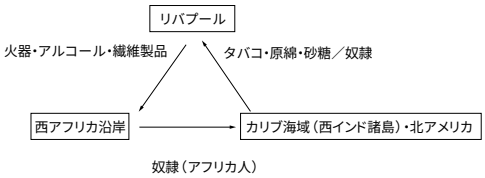
リバプールは、1207年にジョン王から「チャーター（自治都市勅許状）」を獲得したが、その後のほぼ500年間はちっぽけな“漁

表（1）：英・仏十大都市の人口比較[4]

イギリス 1700年		2001年	（万人）	フランス 1700年		1800年		2004年	（万人）
1)ロンドン	575000	1) ロンドン	717.2	1)パリ	500000	1)パリ	550000	1) パリ*	964.5
2)エディンバラ	36000	2) バーミンガム	97.1	2)リヨン	97000	2)リヨン	109000	2) マルセイユ	79.6
3)ノリッジ	30000	3) グラスゴー	63.0	3)マルセイユ	90000	3)マルセイユ	101000	3) リヨン	46.8
4)ブリストル	20000	4)リバプール	46.9	4)リール	60000	4)ボルドー	96000	4) トゥールーズ	42.7
5)エクセタ	14000	5) リーズ	44.3	5)ルアン	50000	5)ルアン	80000	5) ニース	33.9
ニューカスル	14000	6) シェフィールド	44.0	6)ボルドー	45000	6)ナント	77000	6) ナント	27.6
7)グラスゴウ	13000	7) エディンバラ	43.0	7)トゥルーズ	43000	7)リール	56000	7) ストラスブール	27.3
8)アバディーン	12000	8) ブリストル	42.1	8)ナント	40000	8)トゥールーズ	50000	8) モンペリエ	24.5
ヨーク	12000	9) マンチェスター	39.4	9)アミアン	35000	9)ストラスブール	49000	9) ボルドー	23.0
10)コルチェスタ	10000	10) レスター	33.1	10) オルレアン	32000	10) オルレアン	48000	10) リール	22.2
ダンディー	10000							パリの(*)印:都市的地域を含む、の意。	
グレート・ヤーマス	10000								

村”にすぎなかった。1700年（表（1））ではまだまだ十大都市には入っていない。ということは、人口が1万人にも達していなかったということである。ところが1715年、リバプールに最初の奴隷貿易のための商船建造ドックができると、リバプールは「三角貿易」（図（1））の一角として重要性を増し、1807年の奴隷貿易廃止までに一気に大都市の仲間入りを果たしていったのである。

図（1）：三角貿易（slaving triangle）



ロンドンやブリストル、あるいは産業革命期に勃興した諸都市と比較しても、また当時イギリスのライバル・フランスの諸都市と比較しても、リバプールの固有の歴史的文化的性格（＝奴隷貿易）はきわだっていた。フランス奴隷貿易には、三角貿易の「投資（＝奴隷船の艤装に出資）者は多数・多層〔商人以外からも〕」だったこと、一港でなく「多数の港（ナントほか小港町ラ・ロシェル、サン・マロ、さらに大都市ボルドー、ルアンまで）」が奴隷船の母港であったという特徴があった。川田順三は：

> 三世紀にわたる奴隷貿易の結果、数千万人という規模（…略…）の黒人がアフリカから連れ去られ、北・中・南アメリカ諸国の多くは、その後遺症として今日でも、黒人問題をかかえている。しかし奴隷貿易で多くの利益を得たフランスの港町を今歩いても、博物館や古文書館で調べないかぎり、これらの港町がそういう暗い過去をもっていることはわからない。…略…[5]

という。リバプールの国際奴隷博物館や市内の建造物の標識に、奴隷貿易関連事項が明示解説されているのとは対照的である。

さらなる同時代の比較対照のために、鬼頭宏の日本の都市人口のデータをみてみよう：[6]

> 江戸は幕府所在の政治的中枢都市であり、巨大消費都市として、大坂に次ぐ経済センターとして、寛永期（＊）には町方人口だけで15万人、元禄期には35万人、享保期には50万人、武家人口をあわせ100万都市となった。
>
> 石山本願寺の寺内町、秀吉による政治都市としての歴史をもつ大坂は江戸時代に入り、全国各地の商品や年貢米の集まる中央市場の地位を確立した。大坂三郷の人口は町人が大多数を占めるが、寛永期に28万人、明和期（＊）には42万人を数えた。
>
> 宮都として長い歴史をもつ京都は、寛永期には全国一の41万人の人口があったが、享保期には34万人に減少して、江戸・大坂に次ぐ第三の都市になってしまった。
>
> 江戸時代中期以後、人口10万人以上の都市は三都に金沢・名古屋を加えて5都市、人口1万人以上の都市は50以上存在した。このほか各藩の大名城下町や港町・宿場町・鉱山町・寺社門前町に加え、地方の比較的小規模な人口数千人程度の在郷町の発展もみられた。
>
> （参考（＊）寛永（1624‐43）；
> 元禄（1688‐1703）；
> 享保（1716‐35）；
> 明和（1764‐71））

海港としてのリバプール、そして現在

リバプール大聖堂は港からほど近く、イギリス国教会（アングリカン・チャーチ）建築として第1級のものといわれる。かつては修道僧が、小舟でマージー川をわたっていたと記録にあるが、どこの修道僧なのか不明である。この小舟が現在の「マージー・フェリー」になったのである。マージー川河口にドック（前記：1715年）ができた時期はまた、“産業革命”が始動しはじめる時期でもあった。近代の工場制機械工業の先駆けとなるR・アークライト（1732-92）がクロムフォードに水力紡績機を稼働（～1991年まで操業）させたのは1783年。拠点の産業都市マンチェスターは、リバプールからわずか40kmほど東に位置する。リバプールはマンチェスターと川と運河・道路そしてのちに鉄道で結ばれ、産業革命の拠点と貿易の拠点（海港）として、楕円の2つの重心のようにして発展していったのである。

エイザ・ブリッグズは「のちにブリストルに代わって発展をとげる北部の港湾都市リヴァプール（ママ：以下同）は、1800年には王国で二番目に大きな都市となり、「優雅な邸宅」と堂々たる公共建築を誇りにしていた」。そしてさらに「社会史にとって画期的な出来事である1801年の最初の社会調査では、2万人以上の人口をもつ都市の数は15にすぎなかったのが、1851年に28、1891年には63を数えるまでになった。」「…マンチェスターには多数の大「資本家（キャピタリスト）」が存在し、…一方のバーミンガムには小規模の雇用主が多かった。商業の町リヴァプールはまたべつの特徴をもっており、膨大な数の季節労働者をかかえていた。」(7) と記している。

（下線、和数字を算用数字に変換：種田）

すなわち、奴隷貿易の廃止後もリバプールは発展を続けたのである。リバプールのドックの規模は、港湾をとりまいて全長約7哩（マイル）（約10km）にもおよび、リバプール港が扱ったのは普通貨物の輸送だけではなく、ヨーロッパからアメリカ・オーストラリアとその近辺の南洋諸島への大量の“移民”（1830年～1930年に推計約900万人：海事博物館資料より）であった。現在、観光の中心となっているアルバート・ドックが開設したのは1846年。そして歴史上に著名な船舶「タイタニック」「ルシタニア」「エンプレス・オブ・アイルランド」号等は、リバプールで建造されたか、リバプールから出港したものであった。奴隷から移民へ、三角貿易から貨客輸送・商業貿易へと遅滞なく移行・発展・展開できたことが、リバプールの現在につながったのである。

18世紀の中ごろ、マージーサイドはすでに発展の中心になっており、「リヴァプールの港湾計画も構想されていた。すでに1759年には、リヴァプールのある技師が人工運河「サンキー運河」を建設していたのである。」「ペンニン山脈を横断するもっとも重要な水路、リーズ＝リヴァプール間運河は、1770年に着工され、1816年にようやく完成した。」(8) 運河時代の初期は馬車時代の全盛期でもあり、運河建設の最盛期（1790年代）はすぐに鉄道の時代にとって代わられるのであった。

現代、かつての奴隷の子孫がイングランドに逆流してくる事態へ眼を転じてみよう。リバプールも移民・（経済）難民を数多く抱えているのである。A・ブリッグズ（同上書）は次のように記している：(9)

…1948年以前においては、イングランドへの非白人系移民の数はごくわずかにとどまっていた。非白人系移民たちが「よく見かける」存在になったのは、1950年代のことである。初期には、旅行会社が派手な宣伝をうって、おもに西インド諸島からの出稼ぎを積極的にうながした。現地の低賃金と高い失業率とあいまって、イギリスの豊かさと当時の労働力不足が出稼ぎブームに拍車をかけた。1948年に、ジャマイカだけで547人が入国した。…1955年になると、入国者の数は1万8561人にものぼり、その3年後には1万9920人になった。1957年以前は入国者の大多数が成人男性だったが、その年からようやく女性と子供の姿がちらほら見かけられるようになり、その後の2年間に、女性と子供の数は男性をしのぐまでになった。これは、入国者たちが定住する徴候のひとつであった。新たな移民たちは、そのほとんどがイギリスに「母国」としての期待を寄せており、かつ、イギリスに入国して定住する権利（1948年の連合王国国籍法で定められていた）をもっていた。…略…

偏見と衝突が渦巻く中で、人種差別（レイシャル・ディスクリミネイション）（まだ「人種的偏見（レイシズム）」とは呼ばれていなかった）や移民制限、治安活動などの諸問題がようやく議論されはじめた。…ドイツやスイスに労働者として移ってくるトルコ人やスペイン人やポルトガル人とはまったくちがって、イギリスに働きにくる移民はイングランドとなんらかの文化的つながりをもつ旧植民地の出身者であった。にもかかわらず、彼らがやって来る背景や彼らの生活様式について、イングランド人が知っていたことはごくわずかであった。忘れ去られていた歴史がいまやつぎつぎとよみがえってきた。カリブ海周辺からの移民ラッシュのあとには、インド亜大陸周辺からの移民が押し寄せてきた。…71年には移民人口が120万人になった。…略…

緊張が高まる中で1981年の（改正）連合王国国籍法は、「本国と植民地の住人に同一の市民権を与えていた「700年の伝統」に終止符をうち、市民権を3種類、すなわち本国人にたいする市民権、英領植民地住民にたいする市民権、英連邦加盟諸国の住民にたいする市民権」に区分することとなった。この間に、EC[ヨーロッパ共同体：現在のEU]への加盟（1973年）やメディアを通じてのアメリカ文化の影響、そしてその後のサッチャー時代（1979～1990年）を経た時点で、社会史家A・ブリッグズは言う「私たちは、（コンピューターを手にもって）イングランド社会の歴史がはじまった地点に舞い戻っている」のである、と。

リバプールは2004年に世界遺産に登録、そして2008年の欧州文化首都[10]に指定された。世界遺産、文化首都への登録・選定にあわせ、“マージーサイド”一帯はおよそ1億ポンド（約160億円）をかけた再開発と整備が進んだ。すでに7つの博物館施設[11]が開設され更新されている。なかでも「海事博物館」と、2007年《奴隷貿易廃止200年記念の年》に一部開館した「国際奴隷博物館」は、リバプールの「固有の歴史的文化的性格」を来館者に真正面から呈示している。市内各所には、文化首都の“イメージキャラクター”の犬が、象徴的な意味をあらわすように彩色され、たたずんでいた。

この彩色はいったいなにを象徴しているのだろう。そしてこれから先、これまでの歴史の汚点、負の遺産に正面から向き合ってきたリバプールはいったいどこへ向かっていくのだろうか。同市には「Mersey Waterfront Regional Park」建設計画があり、さらなる再開発が進捗し始めたという。それゆえ、リバプールの将来のキーワードは「海」「国際／世界」「人」ではないか、と私はいま考えている。

【注記・備考】

（1）“International Slavery Museum”（National Museums Liverpool, Liverpool 2007：博物館の解説パンフレット）から引用・略訳。また最近の研究では、当時のリバプールの富の少なくとも40%は奴隷関連事業からもたらされたものであると示唆されている。（同パンフより）

（2）川北稔（責任編集）『歴史学事典 1 交換と消費』弘文堂、1994年、p.643～645。

（3）地方自治法改正（1994年）で制度化された、人口30万人以上・面積100平方km以上の都市（39市）をいう。政令指定都市に準じた国の事務が移譲されるが、行政区の設置はできない。

（4）イギリス「1700年」、フランス「1700年」「1800年」の出所：深沢克己『海港と文明　近世フランスの港町』山川出版社、2002年、p.57（表3、表2、表4）より。イギリスの人口「2001年」、フランスの人口「2004年」は：『2006データブック オブ・ザ・ワールド―世界各国要覧と最新統計―』二宮書店、2006年より。

（5）川田順三「「善き野蛮人」から「野生の思考」へ」（二宮宏之編『深層のヨーロッパ』（民族の世界史9）山川出版社、1990年所収：p.193～224、引用はp.205～206）

（6）鬼頭宏『文明としての江戸システム』（日本の歴史19）講談社、2002年、p.147‐8。

（7）エイザ・ブリッグズ（今井宏/中野春夫/中野香織訳）『イングランド社会史』筑摩書房、2004年（原著は1994年：本訳書中には明記されていない）、p.279；302‐303。

（8）同上書 p.328，330：「ジョージ・スティヴンソンの「ロケット号」は1830年にリヴァプール＝マンチェスター間の機関車競走で勝利をおさめた。」（p.330）ここから鉄道ブームとなる。そして「鉄道熱」は「運河熱」をはるかに超えていたのである。

（9）同上書 p.482, p.484；p. 507

（10）「真のヨーロッパ統合には、お互いのアイデンティティーとも言うべき、文化の相互理解が不可欠である。」というギリシアの文化大臣メリナ・メルクーリ（当時）の提唱により、1985年より「欧州文化首都」制度が発足。…一年間を通して様々な芸術文化に関する行事を開催し、相互理解を深める事となりました。…後略…（http://www.eu-japanfest.org/ousyuu/index.html：2008年4月検索）

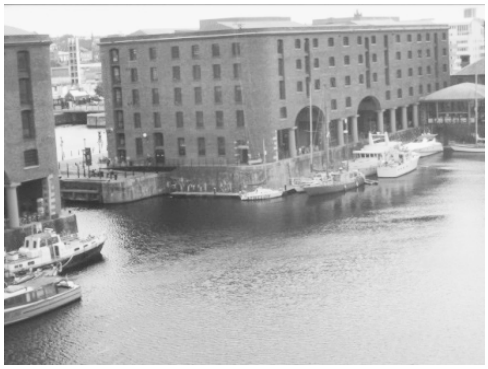
「開催地一覧」抜粋：

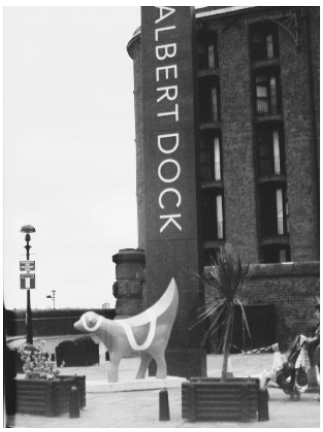
1985年　ギリシア/アテネ	2007年　ルクセンブルグ/ ルクセンブルク ルーマニア/ シビウ
1986年　イタリア/フィレンツェ	2008年　イギリス/ リバプール ノルウェー/ スタバンガー
1987年　オランダ/アムステルダム	2009年　オーストリア/ リンツ リトアニア/ ヴィリニュス
1988年　ドイツ/ベルリン	2010年　ハンガリー/ ペーチ ドイツ/ ルール[地域] トルコ/ イスタンブール
1989年　フランス/パリ	2011年　フィンランド/ トゥルク エストニア/ タリン
･･･中略･･･2000年はミレニアムを記念して9都市が指定された。	2012年　ポルトガル/ ギマランイス スロヴェニア/ マリボル
2005年 アイルランド/コーク	･････以下略･････
2006年　ギリシア/ パトラス	

(11)「リバプールの博物館」
（http://www.liverpoolmuseums.org.uk 2009.06.18.検索）参照：7つとは1）ワールドミュージアム・リバプール、2）ウォーカー・アートギャラリー、3）ナショナル・コンサベーション・センター、4）国際奴隷博物館、5）マージーサイド海事博物館、6）レディ・リーヴァー・アートギャラリー、7）サドリー・ハウスである。また冊子“Liverpool City Region Heritage Open Days 11－21 September 2008”（Liverpool Culture Company/Liverpool City Council,2008）には、文化施設・ツアー・イベントなど113件が紹介されている。

なお、リバプールの観光公式サイトは http://www.visitliverpool.com/（英語版）;（末尾がjpの）http://www.visitliverpool.jp/（日本語）である。

Photo（1）：　リバプール、港湾の点景





建築物や倉庫は補修され、さまざまな用途に再利活用され多くの人びとで賑わっている。ピア・ヘッドの三美神（Three　Graces）と呼ばれる建物（3つのビルディング）が造るスカイラインは、世界有数の眺望と称えられている。

【写真】（種田撮影 2008.08.16.；以下同）

Photo（2）：マージーサイド海事博物館

Photo（3）ビートルズ・ストーリー展示（マージーサイドの倉庫の地下）、入口

写真の右下の「犬」形デザインのオブジェ（ビートルズのジョン・レノンを模した）は、文化首都“イメージキャラクター”である。

Photo（4）：国際奴隷博物館入口：海事博物館に隣接

Photo（5）：国際奴隷博物館内の展示の１つ／著名黒人のポートレート集成